

## ◇ 国 語

国 6-1～国 6-16 まで 16 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

哲学は、少なくとも現在の日本社会では、それなしにはわたしの生が成り立たない、わたしたちの社会が成りゆかない、といったものではない。哲学はまるで特殊な学術研究のようにおもわれ、そういうものがあるのはそれはそれでいいことだろうが、それがなくてもわたしたちは生きてゆけると、ふつうにはそうおもわれている。

たしかに、コンメイ<sup>A</sup>を深め、先ゆきが見えない時代、にっちもさっちもいかない難題を幾重にも抱え込んだ時代、きびしい岐路に立つ時代、そういう時代にはだれもが、あらゆることをもつと根源的な場所から考えなおさなければならぬとおもう。なにかある根源的な視角から世界を別なふうに写像してくれる座標軸として哲学や思想を求める。ある概念を投げ込んだら時代のもやもやがさつと晴れるような、あるいはトウシ<sup>B</sup>できずに淀んだままのもろものアポリア（難題）が一気に結晶作用を起こすような、そういう視角といってもいい。

その意味で、ひとは哲学に過大な答え<sup>C</sup>を求める。じぶんがここにいることの納得できる理由、時代がどうしてこう八方ふさがりになっているかの理由。生きるということの意味、幸福の意味、歴史の意味。あるいは道徳の根拠、正義の根拠……。じつにさまざまの答えを。いずれにせよ意味への問い、理由や根拠への問い、あるいは生きるうえでの軸となり骨格となりうるようなものを、ひとは哲学に求める。ふだんよりもつと深い、思索のあり方をそこに期待する。

他方ではしかし、ひとは哲学にほとんど期待しない。ああでもない、こうでもないと考えつつづけるだけでいつまでも答えにたどり着かない。あれこれの視点があるだけでみんなを納得させられる一般解がない。

具体的な事例について確たる指針を示してくれるわけでもない……。そんな否定の言辞が続く。「結論を出さずいつまでも議論しつづける」技術とか、「濫用のためにくふうされた術語の体系的濫用」（ウィリアム・ジェイムズ）などという揶揄である。

哲学にはこのように、一方では過剰ともいえる期待が寄せられ、他方で過少な期待しか寄せられないところがある。過剰であれ過少であれ、しかし期待が寄せられているその哲学というものについても、おそらくはそれがどういふことなみであるかの像が一つに結ばれているわけではない。哲学という語で思い浮かべられるものは、「経営の哲学」や「蕎麦打ちの哲学」から、「分析哲学」や「超越論的哲学」まで、じつに雑多である。哲学ははたして、学問のなかでももつとも学問らしい

イ 知らないのか、それともその名の由来「知を愛する」からしてまさにアマチュア（愛好者）の知、もつとひどい言い方をすれば「鶴学問」なのか。

ウ 、日々の暮らしのなかの思考としては、たとえば「人様のお役に立つように生きよ」といったある人の生き方や仕事の仕方を貫く信念や信条をさすことがあるし、他方、学問としては、問いを重ねて、考え抜いて、ものごとの真相を突きつめ、真理を究めること、つまりはものごとを根元から捉えなおすというイメージがつきまとう。そんな引き裂かれた思いに、ひとは哲学の入り口で囚われてしまう。

この二つはほんらい、地続きであるはずである。であるはずなのに、哲学は明治期に西欧より輸入されて以来ずっと、こうしたタイキョクにあるイメージへと引き裂かれてきた。じつさい、ひとが人生の基軸としうるような思想を求めて哲学の書物を開いても、その第一目からしてそこに書いてあることがいったいじぶんの問いと何の関係があるのかさっぱりわからないという、そんなすさまじいカクゼツに打ちのめされるのも、めずらしい経験ではない。吸い寄せられるのに、その門口で弾かれてしまう。

ここで突飛ではあるが、ひとがときに思い立って美術館に出かける理由と対比してみるのも無益ではなからう。ひとが美術館に行くのにはいくつかの動機がある。まず第一に、これまでずっと見たいとおもっていたものがやっと見られるので行くというもの。第二は、これまで一度も見たことがないようなものを眼にしたい、あるいはじぶんの眼にこびりついた鱗をぱっと落としてくれるようなショウゲキにふれたい、そういう思いで行くというもの。第三に、これは一応見ておかなければならないから行くというもの。つまり、いまはとくに關心があるわけではないが、美術史で重要な流れに属する作品だから一応見ておく、

エ、別な補助線というのをみずからのまなざしのなかに引いて、美術のなかで起こっていること、これから起こるであろうことをしつかりキャッチするために一度は見ておくという理由である。四番目にもう一つ、大事な動機として、その場身を置くことじたいが楽しい、心地よいというのも考えられるだろう。最後に「暇つぶしに」という、身も蓋もない理由も考えうるが、これはここでは除外するとして、哲学の本を開こうというときにも、以上とおなじような四つの動機がありそうである。（ちなみに、それじたいがひどく液化化して、もはや「美」とか「快」といった観念ではとても輪郭を描くことのできなくなっている現代の「芸術」の定義にも、哲学とおなじような困難がまといついている。）

とくに四番目の動機は哲学においてもなかなか鞏固なものだ。たいていの哲学の本、とくに

オ 　な書物は一度読み

通しても（読み通すことじたいがむずかしいが）一、二割しか理解できないといったことが多い。が、それでもふとまた頁を開いてしまうのは、読む者の胸をぐさすと刺す「殺し文句」がいろんなどころに挟まれているからである。わたしの場合もそれは山ほどあったが、極めつけをいくつか挙げておくと――

自己とは何であるか？ 自己とは自己自身に関係するところの関係である、すなわち関係ということには関係が自己自身に関係するものなることが含まれている。

はじめてこの文言にふれたとき、論理をまるで解けなくて啞然としたが、二十歳ばかりのわたしはこのロジックに心を驚<sup>わしづ</sup>掴<sup>つか</sup>みにされた。じぶんというものをこれまでとはまったく異なった地平から考える可能性があるという予感のようなものに打ち震えた。キエルケゴールの『死に至る病』（斎藤信治訳）の冒頭にある言葉である。

あるいは、パスカル『パンセ』のなかにある、身につまされるような警句――

人間は、天使でも、獣でもない。そして、不幸なことには、天使のまねをしようとおもうと、獣になってしまう。

（前田陽一・由木康訳）

<sup>(四)</sup> 逆説といったものが人間という存在にはつきまとうことをこれで憶えた。このあと諳んずることになった哲学者たちの逆説的な警句は数えようもないくらいある。

（鷺田清一『哲学の使い方』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A コンメイ

- ①メイハクな事実
- ③カンメイを受ける
- ⑤大地がメイドウする

- ②メイセイを得る
- ④メイワクをかける

1

B トウシ

- ①美しさにアットウされる
- ③レイトウ食品
- ⑤デントウのある大学

- ②トウメイな液体
- ④前例をトウシユウする

2

C タイキョク

- ①スイタイの一途をたどる
- ③ジャクタイ化する
- ⑤慎重にタイオウする

- ②レントアイ責任をとる
- ④タイキユウ性がある

3

D カクゼツ

- ①クカク整理
- ③トウカクを現す
- ⑤ジョウカクを構える

- ②カンカクを空ける
- ④大学のエンカク

4

E ショウゲキ

- ①相手とセツショウする
- ③部下をショウアクする
- ⑤大きなダイショウを払う

- ②ショウサイを調査する
- ④車がコショウする

5

問二 空欄

ア

イ

ウ

エ

オ

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中

からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

① 一般的

② 表面的

③ 抽象的

6

④ 積極的

⑤ 相対的

イ

① 職業的

② 精神的

③ 抽象的

7

④ 圧倒的

⑤ 基礎的

ウ

① いいかえると

② まさに

③ どちらかという

8

④ 断言すると

⑤ とりあえず

エ

① もちろん

② つまり

③ そのうえ

9

④ あるいは

⑤ したがって

オ

① 重要

② 古典的

③ 普遍的

10

④ 歴史的

⑤ 有名

問三 傍線部（一）「過大な答え」とは、どのような意味か。正しくないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

11

- ① 生きるということの意味
- ② 自分がここにしていることの理由
- ③ どうすれば楽に生きられるか
- ④ 幸福の意味
- ⑤ 道徳や正義の根拠

問四 傍線部（二）「そんな引き裂かれた思いに、ひとは哲学の入り口で囚われてしまう」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

12

- ① 哲学には「経営者の哲学」や「蕎麦打ちの哲学」、「分析哲学」「超越論理哲学」まで実に雑多である。
- ② 哲学は日々の暮らしの中の生き方や信念なのか、あるいは学問としてものごとの真相を突きとめ、真理を究めることなのか、迷ってしまう。
- ③ 哲学には一方では過剰とも言える期待が寄せられ、他方では過少な期待しか寄せられないところがあり、人はそのどちらが正しいか迷ってしまう。
- ④ 哲学は明治期に西欧より輸入されて以来ずっと難解な学問と考えられてきた。
- ⑤ 哲学は日本ではまるで特殊な学術研究のように思われ、人々はそれがなくても生きてゆけると思っている。

問五 傍線部(三)「四つの動機」にあてはまらないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 難解な哲学の本を読むことは、忍耐力を養うことにつながるから
- ② 哲学の本を読んで、これまで一度も経験したことがないようなものを経験したいから
- ③ 哲学の本を読むこと自体が楽しく、心地よいから
- ④ 今はとくに興味があるというわけではないが、哲学の歴史の中で重要な位置をしめる本だから
- ⑤ ずっと読んでみたいと思っていたが、やっと読む機会にめぐまれたから

13

問六 傍線部(四)「逆説といったものが人間という存在にはつきまとう」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 人間は、自分の目指している生き方とは正反対の生き方をすることが多い。
- ② 哲学は他人の役に立つために存在しているのではなく、またそれを目指してもいない。
- ③ 哲学者の中には、逆説的な警句を繰り返し、論理を難解にする人が多く存在する。
- ④ 哲学書には、一見矛盾しているようだがよく考えてみると実に真実を突いていることがよくある。
- ⑤ 人生には何かのきっかけで、これまでとは全く違う生き方を迫られる場合がある。

14



問七 この文章につける題名として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 哲学は学問か？
- ② 私の哲学体験
- ③ 哲学入門
- ④ 哲学への誤解
- ⑤ 哲学と実生活

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「サザエさん」に登場する子どもたちの年齢は実によく選んであると感心する。カツオくんの学年は五年生で、その妹ワカメちゃんは三年生だそうである。「ドラえもん」に登場する子どもたちの学年はわからないが、三年生から五年生までの感じである。

ちやうど、集まって一人遊びをするという段階から、一緒にルールに従って遊ぶ——協力し、妥協し、競争するという、アメリカの精神科医サリヴァンが「児童期」（入学から八歳ないし九歳までの時期）に身につけることが望ましいと言った、まさにそのことを、「ドラえもん」の子どもたちはやろうとしている。やろうとしてしくじったり、うまくいったりである。

ついでに言えば、サリヴァンは、この時期の子どもが引き籠って（建設的夢想とはちがう）白昼夢にひたることがあって、それは好ましくなくも言っているが、「負け犬」ののび太はいじけるたびに白昼夢に引き籠るケイコウ<sup>A</sup>がある。ア、一時この白昼夢につきあうように見せ掛けながら、現実引張もどすのがドラえもんである。ドラえもんは、彼の将来を心配する未来から送りこまれた、のび太に現実原則を教える機械である。

なるほど、ドラえもんは、いかにも子どもの夢に沿った、子どもに都合のよいようにことの成り行きを曲げる小道具を持っている。もつとも、「どこでもドア」とか「タケコプター」のような、「ドラえもん」を漫画たらしめている基本条件のようなのは別として、虫のよい空想は実らない。フェアでない小道具を乱用すると結果が使われないよりもさらによくないようになってくる。これは、現実が「甘くない」ことを子どもに告げなければならぬと思っている大人たちをも安心させ、だから、この漫画を親が買って与えるという仕掛けになっている。

イ 「ドラえもん」は、子どもの夢を誘うだけではない。子どもが小学生か、それ以前の時期、親たる自分も若く、たとえ貧しくともクツタク<sup>B</sup>のなかった時期を永遠たらしめたい気持ちも持っているだろう。「ドラえもん」が始まったころ親になった人は現在五十歳以上になつていようか。その年齢の人の郷愁を誘うかのように、のび太たちの住む町は、れっきとした東京の住宅地であるらしいのに、土管などを積んである空き地やドングリの実の落ちていそうな裏山がある「特別な場所」である。

小学四年以後になると子どもには知力や親の経済力等による選別の圧力がいやおうなしにかかってくる。

やがて、親のほうにも、子の教育費のフタんと、老いてくる自らの親の面倒と、自分の職場での責任増大（あるいは家庭経営の複雑さ）がのしかかってくる。政府の発行する国民生活白書でも、三十五歳から五十五歳の時期がフタンのいちばん大きい時期としていた。ウ、個人が病気を持つ確率は四十歳を越えると急に増すので、自分と親の二世代の医療費が増大することも見込まなければならぬ。家計にもっとも大きな影響を及ぼすものは、住宅を最後にして物質財でなくなり、今後は教育費と医療費となると思う、アメリカがすでにそうであるように。

それは同時に、家庭経営の立場から言えば正念場であり、時には前進の機会でもあるのだが、こういう転換期に直面すると、親のほうにも幻想の中に逃げ込みたい気持ちが働くようになる。

親子のきずなが、親子の成長の足を引っ張る形を取るのには、こういう転換期であると私は思う。親子の分離がうまく行くかどうかを決める因子の一つには、こういう時期に、親子が現状にしがみつき、さらにはもっと以前の状態に戻ろうとするかどうかによる。

親子のきずなが幼年時代にどうであったかということも重要であるが、それは大人になるまでに修正される機会がいくらかもある。

そういえば、「サザエさん」の家族構成は現実にくつないような構成であって、あれは、うまく、転換期的な年齢の構成人員がいまいちよくなっている。そのためにか、かなり不自然な家族構成なのだが、読者は、あまり気づかないようだ。あの家族構成には不安をそそるものがないからである。両親は五十代かそれ以上であるらしい。それにしても大変小さい子がいるのだが、子育ての責任は、うんと年長の姉サザエさんが分担している。この姉は既婚で、その夫と父親との家計分担は不明だが、父親が倒れても幼い子どもが路頭に迷うことはなさそうだ。夫の家族は全然出てこなくてヤツカイがない。世代間境界が不鮮明であるが、ある序列はあつて、しかも世代間のギャップが最小になるようになっていて、思春期の少年少女がいない。登場人物の年齢を十年上げてみると「サザエさん」の世界は成り立たないのである。

(中略)

家庭の歴史は、一様な流れではない。定常状態が数年続いたかと思つたら、一年一年が変化、転換の年だという時期が来る。

死を例にすると、平均して数年に一人ずつ死者が出る家庭よりも、十数年あるいはそれ以上も死者が一人もなくて、それから数人の死者を一、二年の内に出すという家が多い。家族の年表を描くとよくわかることだ。子どもの巣立ちも同様である。ただ、自立といっても、生理的に大人になる思春期から、心理的に大人になる時期、さらには社会的に大人扱いをされる時期、経済的に自立できる時期、結婚による自立がある。結婚によっても自立できない人もあるが、子どもを授かること、親の死に目にあうことなどは、さらに一段階上の精神的な自立の機会となる。

これらがひとつ前の世代、エ 親たちの孤立化と平行して進行する。実際には、子どもにとっても自立は孤立につながりかねないが、親の側でも、孤立は自立（子への依存などからの自立）でもある。このように、両者がもつれあつて進行する。特に双方が同時に転換期に遇つた場合には、現在を永遠化した願望が、親子のきずなを現状固定に向かわせる。現在を永遠化した願望が普遍的にあるのは、漫画の人気を見てもスィイツ<sup>F</sup>され、それ自身はあつても自然だが、そこから、親子二人での退行が始まることもあるわけだ。

子どもの自立への動きは、なかなか察しがたいことがある。生理的な巣立ちの準備は女性では初潮という形をとつて親にもわかるが、男性では曖昧に処理されることが多かるう。心理的に大人になるのは一瞬のことではないが、親がはつとそれに気づく瞬間というものはある。それは、子どもがそれまで稚魚のように透明だったのが、にわかには不透明になつて、何を考えているのか、わからなくなるのに気づくという形を取る。子どもの考えはすっかり見通しだと考えている親は、この時期からは良い親というよりは侵襲的な親となる。不可侵の自我を持つことは不可侵の秘密を持つことである。

（中井久夫『「つながり」の精神病理』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ケイコウ

- ①顧客のイコウを確認する
- ③犯罪のジコウが成立する
- ⑤尊大な態度にヘイコウする

- ②ネンコウ序列の制度
- ④親コウコウする

16

B クツタク

- ①原野をカイタクする
- ③国民のシンタクを受ける
- ⑤ジュンタクな資金

- ②二者タクイツ
- ④ザタクを囲んで食事する

17

C フタン

- ①フキユウの名作
- ③情報技術のフキユウ
- ⑤海外へフニンする

- ②競技中にフショウする
- ④老いた親をフヨウする

18

D ヤツカイ

- ①宗教上のカイリツに背く
- ③従業員をカイコする
- ⑤病人をカイホウする

- ②病気がカイホウに向かう
- ④若かった頃をカイコする

19

E スイサツ

- ①横ばいでスイイする
- ③キツスイの江戸っ子
- ⑤目的をスイコウする

- ②重工業がスイタイする
- ④一人暮らしでジスイする

20

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ① しかも
- ② ところが
- ③ 要するに
- ④ もちろん
- ⑤ そこで

21

イ

- ① さて
- ② つまり
- ③ すると
- ④ だが
- ⑤ したがって

22

ウ

- ① すなわち
- ② そのため
- ③ そのうえ
- ④ ただ
- ⑤ そこで

23

エ

- ① つまり
- ② なおさら
- ③ ただし
- ④ また
- ⑤ このように

24

問三 傍線部 (a)・(b)・(c) の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 虫のよい

- ① 誰にも都合がよい
- ② 自己中心的で身勝手な
- ③ おおらかで機嫌のよい
- ④ 自然の法則に反した
- ⑤ なんとなく好感のもてる

25

(b) 正念場

- ① 苦しいが重要な場面
- ② 正直であるべき場面
- ③ 心が洗われる場面
- ④ 現状にしがみつ়く場面
- ⑤ 常識の通用しない場面

26

(c) 路頭に迷う

- ① 生きる目的を見失う
- ② 悲しみに打ちひしがれる
- ③ 生活に困窮する
- ④ 将来の進路に迷う
- ⑤ 路上で迷子になる

27

問四 傍線部(一)「子どもの夢を誘うだけではない」とはどういうことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

28

- ①のび太のような子どもの夢に付き合ってみせるだけでなく、現実が「甘くない」ことを教える役割があるということ。
- ②子どもの夢を単に夢想と扱うのではなく、便利な小道具によって科学技術が進歩した未来に期待を抱かせるということ。
- ③夢を誘うだけでなく、いじめっ子に「負け犬」として扱われるような子どもも社会の残酷さが描かれているということ。
- ④子どもの夢だけでなく、親にとっても、家庭に不安のない、子どもが小さい頃のことを懐かしく思わせるということ。

問五 傍線部(二)「登場人物の年齢を十年上げてみると「サザエさん」の世界は成り立たない」とは、どういうことか。その答えとして適当でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ①年齢を十年上げると、舞台である時代も大きく変わってしまうため、今のような話にできないということ。
- ②サザエさんの両親が老いに伴う問題を抱える可能性があり、家庭経営に苦労するようになるということ。
- ③サザエさんの子が思春期にあたり、親への反抗など、家庭の安定が乱れることが予想されるということ。
- ④サザエさんの弟や妹が自立して家を出る年齢になり、家族構成を維持することが困難になるということ。



問六 傍線部(三)「親子二人での退行が始まる」とはどういうことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

30

①年老いて体力や記憶力などの退行が始まる親に対して、今度は子どもが面倒を見る立場になり、立場は逆転したが面倒を見る、見られるの關係に戻るとのこと。

②親子がそれぞれ自立しなければならぬ時期に、孤立への不安に耐えられず、子どもが幼い頃のような互いに依存しあつた關係に安住し続けるとのこと。

③子が自立しても親子のきずなは守られねばならないため、きずなが失われがちな現代にあつても、それが重視されていた時代の価値観を見直すということ。

④漫画の人氣が高いことからわかるように、現代では親世代すら漫画を楽しむようになり、親子ともいつまでも子ども気分が成熟が見込めないということ。